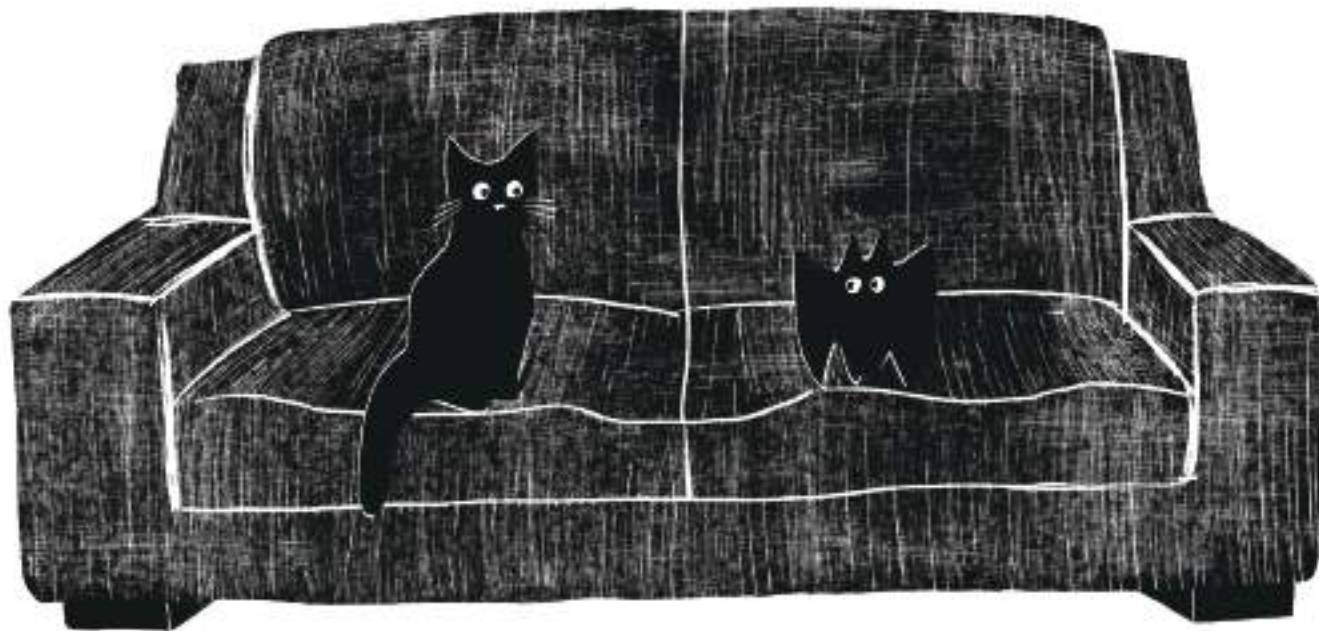


いっか いちにち
ブラック一家の一日



さく・え おおぎたにはるな



ブラック一家はにぎやかな魔法使いの家族です。

くにいちばん 魔法使いのおばあちゃん、お父さんとお母さん、マコちゃん、

黒猫のブブ、コウモリのダダが暮らしています。

いえ せんぞだいたい つ りっぱ
家には先祖代々受け継がれた立派なソファもあります。

マコちゃんのひいおばあちゃんや、そのひいおじいちゃん、

そのまたひいひいおばあちゃんの生きていた頃から、

ブラック一族を見守ってきました。

そんな一家の一日を、ちょっとばかりのぞいてみましょう。



あさひ のぼ あたら いちにち はじ
朝日が上り、新しい一日が始まりました。

いちばん お
一番に起きてきたのはおばあちゃん。

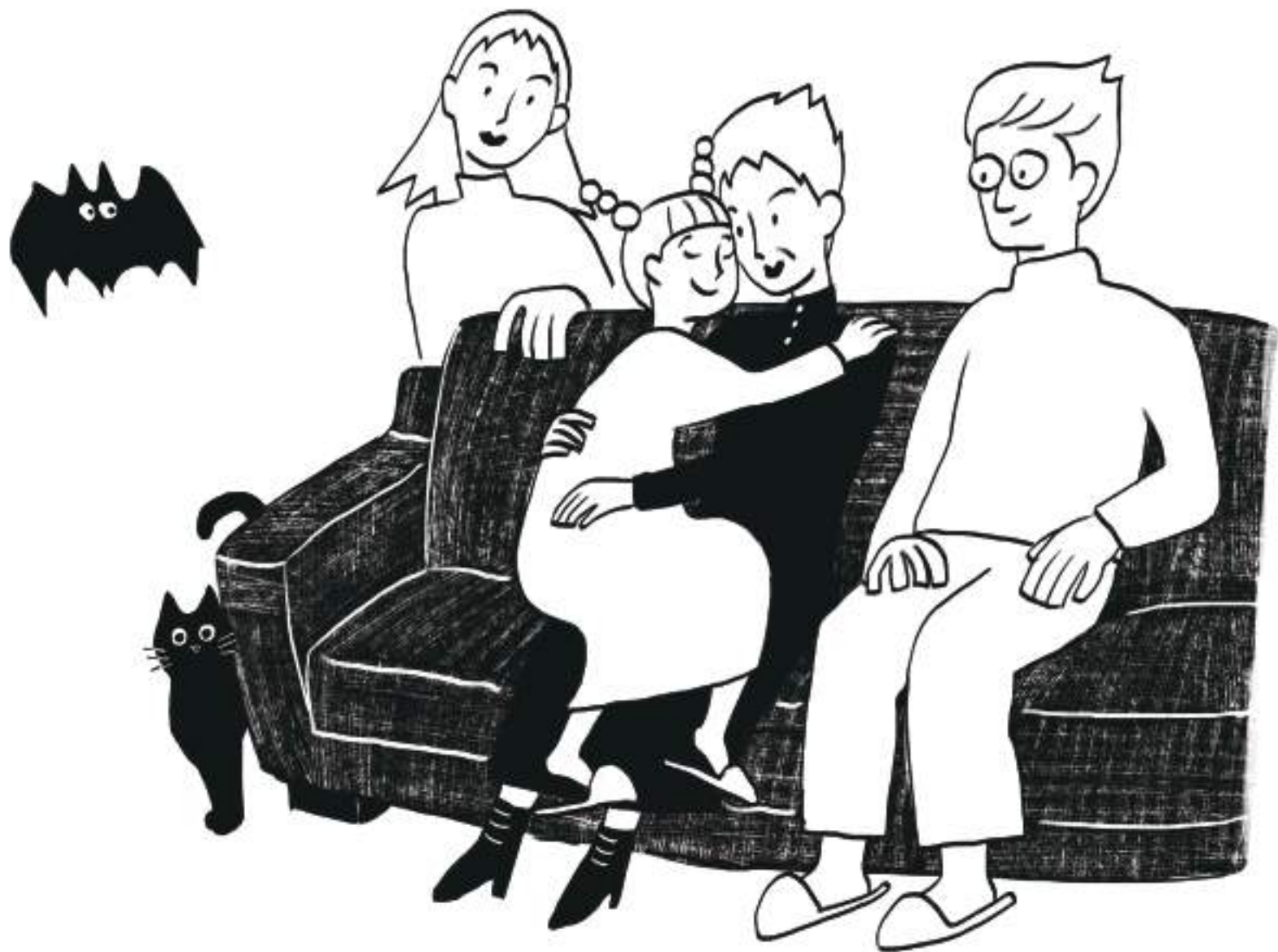
こしか そと けしき なが につか
ソファに腰掛けて外の景色を眺めるのが日課です。

「おはよう、ブブ、ダダ。今日は仕事で隣の国へ行ってくるよ。

かえ よるおそ
帰りは夜遅くなるだろうね。」

くにいちばん まほうつか い いろ くに ひ ば
国一番の魔法使いと言われるおばあちゃんは色んな国から引っ張りだこ。

あこが まほうつか
マコちゃんにとって憧れの魔法使いです。



お母^{かあ}さん、お父^{とう}さん、それからマコちゃんもお^お起きてきました。

おばあちゃんの座^{すわ}るソファに集^{あつ}まって、朝^{あさ}のあいさつをかわします。

「おばあちゃん、お父^{とう}さん、お母^{かあ}さん、おはよう。」

「みんな、おはよう。」



みなでおばあちゃんの出発しゅっぱつのお見送りみおくをします。

「それではいってくるよ。」

ほうきにまたがり、おばあちゃんいは言いました。

お父さんとう、お母さんかあ、マコちゃんも口々に言葉くちぐち ことばをかけます。

「おばあちゃん、いってらっしゃい！」

「お仕事しごとがんばってね！」

「いってらっしゃい、安全飛行あんぜんひこうでね！」

みなで大きく手おお て ふを振り見送みおくります。

おばあちゃんすがたの姿はあつという間まに見えなくなりました。



へ や もど とう かあ の
部屋に戻ると、お父さんとお母さんはコーヒーを飲みながら

いちにち よてい はな あ
一日の予定を話し合います。

ふたり やくそう みせ いとな
二人は薬草とまじないのお店を営んでいます。

あと もり やくそう
「ぼくはこの後、森で薬草をとってくるよ。

ねむ よ やくそうちゃ ざいりょう のこ すく
眠りに良い薬草茶の材料が残り少なくなっていたね。」

「そうだったわね。

ひる かいてん ぐすり ちょうごう
わたしはお昼の開店まで、まじない薬の調合をするわ。」

そしてマコちゃんはというと…



マコちゃんは自分の部屋で出掛ける支度をしていました。

「ハンカチに魔法の杖、お財布に鍵、教科書も忘れず入れたわね！」

マコちゃんは新米魔法使い、経験豊富な魔法使いのもとで学んで、
腕を磨いているのです。

今日の授業はお昼からです。

家を出る時間まで魔法の練習をすることにしました。



「クルクル草のしぼり汁と氷の国の湖の水、人魚の涙を三滴いれて、

後は魔法の呪文を唱えたら虹色の髪染め薬が完成するはずよ。」

はりきって練習するマコちゃんでしたが…

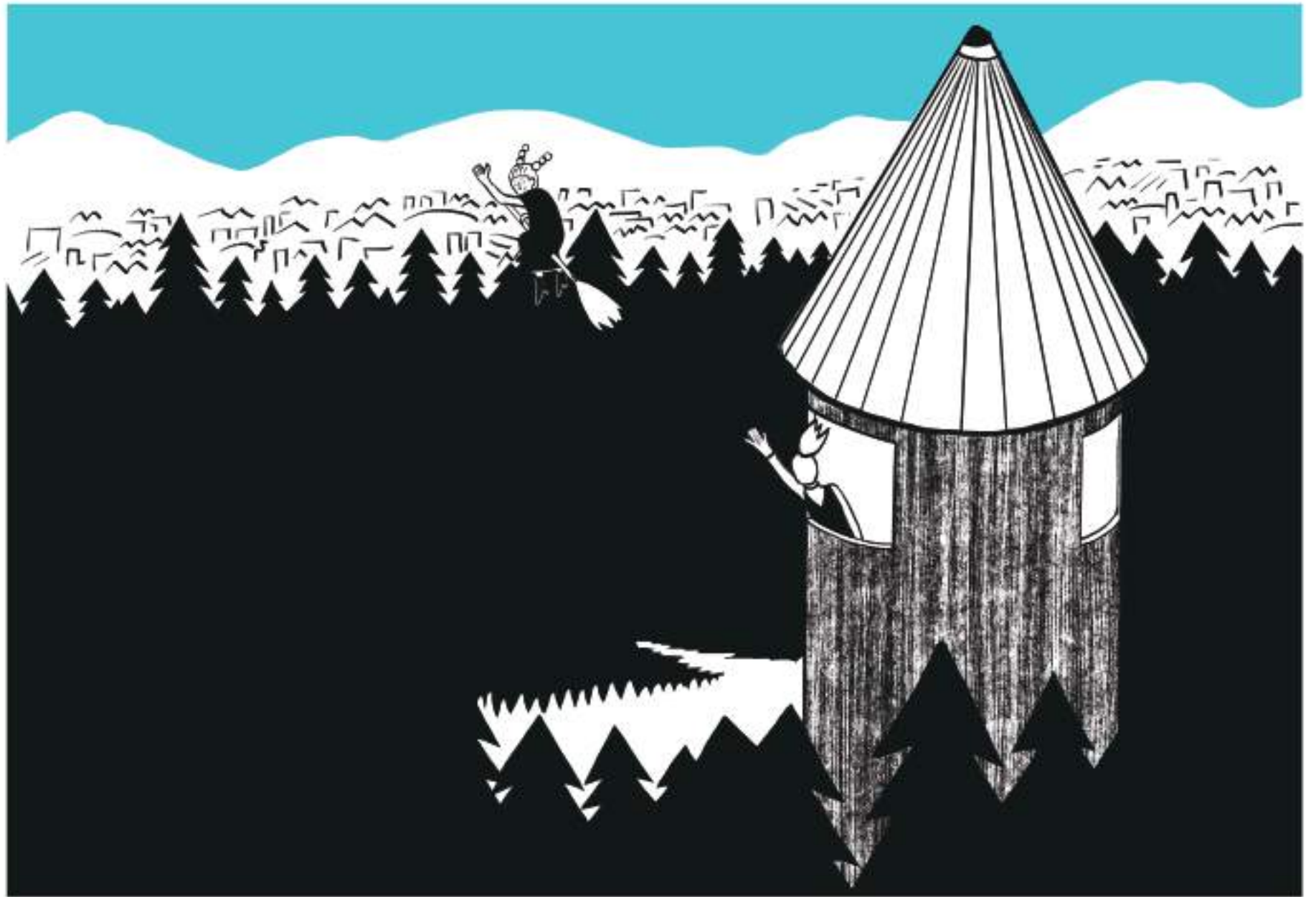
ボンッ！

へやじゅう
部屋中がもくもくと煙に包まれました。

き つ
気が付けばマコちゃんもブブとダダも緑に染まっています。

「あー、失敗だ！どこを間違えたんだろう。」

まほう むずか
やはり魔法は難しいようです。



そうしているうちに^で出^か掛ける^{じかん}時間になったようです。

「そろそろ^い行かないと！

^{いそ}急がないと^{じゅぎょう}授業に^{ちこく}遅刻しちゃう、いってきます！」

マコちゃんはほうきに^と飛^のび乗りました。

「行ってらっしゃい、がんばってね！」

^{かあ}お母さんが^て手^ふを振って^{みおく}見送ります。



ぐつぐつコトコト、まじない薬ぐすりの調合ちょうごうをするお母かあさん。

そこへ薬草やくそうとりを終おえたお父とうさんが帰かえってきました。

「ただいま。たくさんとれたよ。」

これでしばらくは材料ざいりょうに困こまらないと思うよ」

「ありがとう、助たすかるわ。」

お父とうさんはそこでブブとダダちががいつもと違ちがうことに気きが付つきます。

「ブブとダダはどうしたの？」

「マコちゃんまほうの魔法れんしゅうの練習みどりで緑みどりになってしまったのよ。」

「そうだったのか、マコちゃんがんばっているね。」



もくもく ^{ぐすり} やくそう ^{じゅんぴ} の ^{とう} 準備をするお父さんとお母さん。

^{みせ} ^{かいてんじかん} が ^{ちか} 近づいてきたようです。

「^{じかん} そろそろ時間ね、^{ぐすり} ^{ちょうごう} まじない薬の調合も ^お ちょうど終わったわ。」

「^{みせ} ^も ^い ^{ぶん} ^{につく} ありがとう。お店に持って行く分の荷造りも ^お 終わったよ。」

^{ふたり} 二人はいつでも ^{なかよ} ^{たす} ^あ 仲良く助け合ってお店を ^{みせ} ^{いとな} 営んでできました。

もちろん、たまにケンカもしますがね。



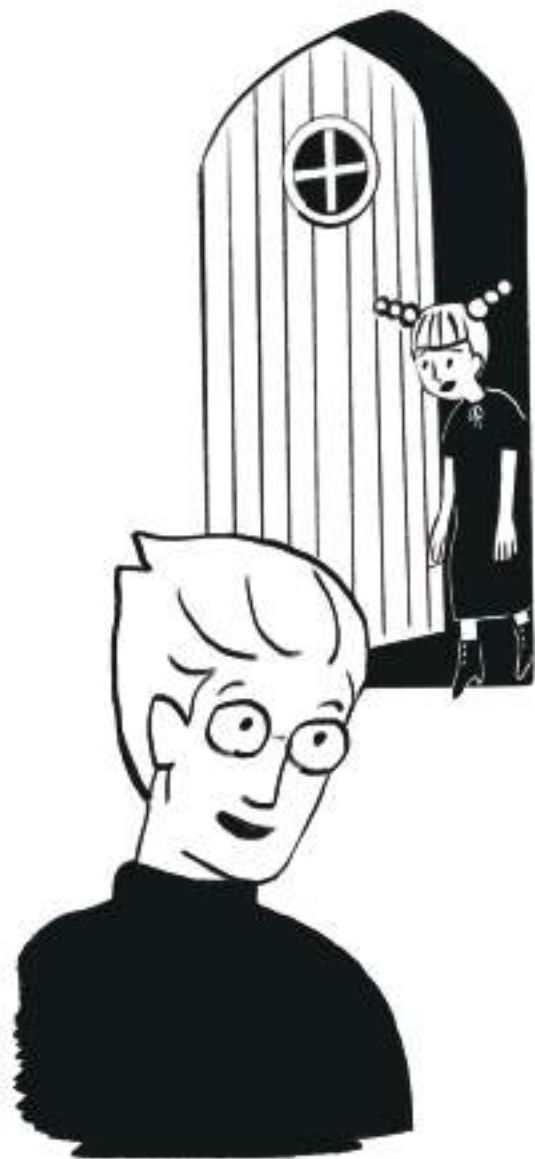
「それじゃあ、いってくるよ。」

「ブブ、ダダ、留守を頼んだよ。」

にぎやかな家族が出掛けて、家の中に静けさがおとずれます。

ブブとダダは日差しの当たるぽかぽか暖かいソファの上で、

しばし昼寝を楽しむことにしました。



ゆうがた しごと お かぞく かえ
夕方になり、仕事を終えた家族が帰ってきました。

「ただいま…」

「おかえり！」

マコちゃんもかえ帰ってきたようです。

でも、どこかげんき元気がないようす様子です。

どうしたのでしょうか？

いつもたの楽しくにぎやかなゆうしょく夕食のせき席も、今日はきょう静しずかです。



げんき
元気のなかったマコちゃんは、ついにシクシク泣き出しました。

なに
「マコちゃん、何かあったの？」

かあ
お母さんがたずねます。

しっばい
「わたしはいつも失敗ばかり。どうしてうまくいかないんだろう…。

じょうず
みんなは上手にできるのに。

かんぺき
わたしだって…もっともっと完璧に、おばあちゃんみたいな

りっぱ まほうつか
立派な魔法使いになりたいのに！」



なん ころ
「何でもないところで転んだし…。

きょう まな まほう せんせい み ひ
今日は学んだ魔法を先生に見てもらった日だったの。

わたしはやったのは、たくさん練習してきた炎の魔法よ。

でもね、途中で呪文を間違えて魔法は失敗。

かみ け すこ
髪の毛も少しこげちゃった。

わたしには魔法使いは向いてないのかな。」

しっばい かさ じしん
失敗が重なり、マコちゃんはすっかり自信をなくしてしまったようです。



そんなマコちゃんにお母^{かあ}さんは言葉^{ことば}をかけます。

「うまくいかなかったって大丈夫^{だいじょうぶ}、たくさん失敗^{しっばい}して良い^いのよ。

一生懸命^{いっしょうけんめい}がんばったならね。

それにね、知^しっている？

おばあちゃんだって、初め^{はじ}から立派^{りっぱ}な魔法使^{まほうつか}いだったわけじゃない。

わか^{わか}ころ^{ころ}くにいちばん^{くにいちばん}あば^{あば}まじよ^{まじよ}よ^よ
若い頃は国一番の暴れ魔女^{まじよ}って呼ばれていたのよ。」

マコちゃんはおどろきます。

「ええ、おばあちゃんが？」

「そうよ、呪文^{じゅもん}を間違^{まちが}えて家^{いえ}を吹き飛ば^ふしたり…」



とう　　い
お父さんも言いました。

まちじゅう　　そ
「街中をピンクに染めてしまったこともあるんだよ。」

きょう　　みどり　　そ
「今日、わたしが緑に染めてしまったみたいに？」

おな　　よう
「そうそう、まさに同じ様にね！」



おうさま さかなあたま
「王様たちを魚頭にしてしまったこともあるんだって。」

こくみん まえ おうさま きゅう さかなあたま
「国民の前で王様たちが急に魚頭になったものだから、
まわりは大変なさわぎだったとおばあちゃんに聞いたわ。」

はじ き はなし
マコちゃんには初めて聞くお話ばかりでした。

しっぱい
「おばあちゃんも失敗をしていたなんて！

さいしょ まほう とくい おも
おばあちゃんは最初から魔法が得意なのだと思っていたわ。」

まほう だいす
「おばあちゃんは魔法が大好きだったからね、

まわ い つづ
周りからなんて言われようが続けたのよ。」

いま くにいちばん まほうつか
「今では国一番の魔法使いさ！」



だいじょうぶ い
「大丈夫、あせらなくて良いのよ。」

しっぱい
それに失敗ばかりじゃないでしょう？

でき かんが
出来るようになったこともあるんじゃない？考えてみて。」

かんが
マコちゃんは考えてみました。

ほし あつ まほう いちど つぼ あつ
「星のきらめきを集める魔法は、一度で壺いっぱい集められるようになったわ。

にんぎょ とくせい ひとり つく
人魚のうろこをきれいにする特性クリームも一人で作れるようになったの。」

いっぽ すす
「すごいじゃない！あなたも一歩ずつ進んでいるわ。」

しっぱい だいまほう
「そうだね、それに『失敗は大魔法のもと』っていうだろう？」

とう かあ ことば ところ ひろ
お父さんとお母さんの言葉がマコちゃんの心にぽかぽかと広がっていきます。」



マコちゃんは大事なことを思い出しました。

「うまくいかないことだって、きっとまたあるかもしれない。

それでもわたしは魔法が大好きよ。

あたらしい魔法ができるようになるたび、ワクワクするの。

わたしの魔法でみんなが笑顔になると、わたしもとっても幸せよ。」

「その気持ちは誰よりもあなた自身が大切に守ってあげなさい。

悩んだときは一緒に話を聞いわ。」

お父さんとお母さんはマコちゃんをぎゅっとだきしめてくれました。

「さあ、そろそろ寝よう。明日も元気に過ごせるように。」



かぞく ねむ へ や くらやみ つつ
家族は眠りにつき、部屋は暗闇に包まれました。

ほし せいれい よぞら ひろ ようす なが
星の精霊のマントが夜空に広がる様子を、ソファからブブとダダは眺めます。

きょう
「今日もにぎやかだったね。」

あす お
「明日はどんなことが起こるだろう？」

ブブとダダは話せるのです。ただの黒猫とコウモリではありません。

にひき よんひゃくさい け ちょうろう
二匹は四百歳、ブラック家の長老です。

「にぎやかで、楽しくて、わたしはブラック一家が大好きだよ。」

じつ はな
実はソファも話せます。

だってここは魔法の世界ですから。



すっかり夜も更よけたころ、おばあちゃんかえが帰ってきました。

「やれやれ、すっかり遅おそくなってしまったね。

さすがにくたびれたよ、ああ眠ねむたい。」

あしたあしたはどんな一日いちにちになるでしょう。

きっとまた、にぎやかたので楽しい一日いちにちになるでしょう。

これがブラックいっか一家いちにちの一日です。

NOYES
SOFA 100%